6．人間観

6－1．人間の分類

6－1－3．身分・家系による分類

生まれたのは、新平賀で、大正6年9月27日だ。本当は、8月31日らしい。戸籍に入れるときに行き違いがあったらしい。

父が元蔵、母がハナ。父は、明治19年生まれ、母は、明治23年生まれである。家族は、6人兄弟で、男が4人、女が2人であった。ハマが長女で、強巳が長男、次男忠一は亡くなった。次女がキワコ、苫小牧にいる三男が豊、四男が幸司である。

［門別　鍋沢強巳氏］

父元蔵の2代前ワカルパ　wakarpa　は、ユーカル　yukar　の上手な人だった。ワカルパの父がイエプリキンで母がウクピリカで、その3番目がワカルパだ。ワカルパの息子は死んでいない。ヒロシさんもナカさんも死んでしまっていない。ワカルパの連合いがタウクノさん。子供が娘ユキと息子エマチだ。父元蔵は、ユキはおばさんだと言っていた。父元蔵は15代目だと言っていた。鍋沢はコタンコロクル　kotan kor kur（首長）系の家系だ。父元蔵の母は、平賀姓である。元蔵の母は、結婚に反対され、伯父の子にされて結婚した。

［門別　鍋沢強巳氏］

新平賀には、3つのコタンがあり、三軒屋のコタンコロクルは、鍋沢ウセンカで、ニナツミのコタンコロクルは、鳩沢ポロアイヌ、鳩沢サカンレキ、ピラカのコタンコロクルは平賀サンロカだ。鳩沢ポロアイヌは体の大きな人だった。シウンコツにいるときには、ポロアイヌは経済力のある人だったが、雄弁なのはサカンレキの方だ。サカンレキが亡くなったとき元蔵が引導渡しをした。新平賀の3つのコタンをまとめる村長であった（門別編10－4－1参照）。

［門別　鍋沢強巳氏］

6－4．身体の世話

6－4－7．巫術

鳩沢ワテケさんなんかもトゥス　tusu（巫術）をやったものだ。実際にトゥスをやっているのを見たことがある。自分の母親が胃ケイレンで七転八倒して苦しんだ時、近所の三軒屋の端の家の平賀為吉の母、父の叔父の嫁である鍋沢チテレが来てトゥスをしてくれた。父の元蔵がカムイノミ　kamuynomi（神への祈り）してトゥス　tusu（巫術）をチテレにしてもらった。

チテレはトゥスを始める前に欠伸（あくび）をする。最初は酔ったように体が揺れて、手を伸ばして合わせ、キツネがついたように年寄りなのに床から空中に浮いて飛び跳ねながら進む。そのうちにしゃべり出す。俺は何々だよ、などとはっきりとしゃべる。死んだ人が出てきて「酒を飲ませろ」とか「煙草を飲ませろ」ということがある。そんなときには要求されたものをトゥスの人に飲ませる。最後に疲れたのか、「アー、こわかった」という。

［門別　鍋沢強巳氏］

6－4－8．占い

チカプサパカムィ　cikap sapa kamuy　というフクロウの頭をキケで巻いたものは、普段は宝壇のシントコの上の高いところに置いてあり、占いに使う。他の骨を使うのは見たことが無い。上から頭骨を落し、まともに立ったらどうなるとか、ひっくり返ったらどうなるとか占っていたものだ。フクロウの頭をもっている人はそんなに多くない。こういう物はみんな同じ物を持っているものではない。元蔵は、ユクツエだとかピタルパだとかから馬で迎えに来られ占ってくれと、呼ばれて行った。元蔵は、イヨィタクコテ　iyoytakkote（引導わたし）とかにもよく呼ばれて行った。今の坊さんみたいなものだ。占うことをコイピシ　koypis（「尋ねる」）という(占いの道具の送りについては門別編７―９参照)。

［門別　鍋沢強巳氏］

6－5．人の一生

6－5－8．女性とカムィノミ

カムィノミ　kamuynomi（神への祈り）は、その家の親父さんがするもので、女がするものではないから、女ばかりの家だと、カムィノミはできない。正月のカムィノミもできない。

［門別　鍋沢強巳氏］